

研究会報告

日本語のソフトパワーを通じてオーストラリアの社会に居場所を作り出す韓国人

ラブリー・エスター

Young Koreans Finding Their Place in Australian Society

Via the Soft Power of Japanese Language

LOVELY Esther

Compared to Japan's pop culture, food and technology, Japanese language is often overlooked as a source of soft power. However, based on analysis of longitudinal interview data collected from among 11 young Korean people living in Australia I demonstrate that studying Japanese language helped some participants to consolidate their position in Australian society. During the interviews the majority of participants mentioned that in Australia, Japanese language was more popular and well-known among Australians compared to Korean language and culture. In particular, two of the participants found that studying Japanese language and acquiring Japanese proficiency played a valuable role in allowing them to form social networks with local Australians, and finding employment. In this way, accessing the soft power of Japanese language in Australia allowed the participants to gain a secure place in Australian society.

1. はじめに

「ソフトパワー」という言葉は日本人には馴染みがないと思われる。ソフトパワーとは“…the ability to get what you want through attraction rather than through coercion or payments” (Nye, 2004, p. x)、すなわち「強制より魅力を通じて求める効果を果たす技量」と訳すことができる。さらにソフトパワーには国際的にも良いイメージを持たせるという意味もある。国のソフトパワーのツールとしては「美術」「ツーリズム」「料理」「建築」などが含まれる。「言語」もソフトパワーのツールの一つである。2017年に日本のソフトパワーは世界の国の中で6位に位置づけられた¹。外国で人気のアニメや漫画のソフトパワーに比べると、言語としての日本語のソフトパワーは弱く見えるかもしれない。しかし、本稿では、11人の韓国人のケーススタディを通し、日本語のソフトパワーがオーストラリアに移住した彼らに様々な新しいアイデンティティーを与えた、ということを示したい。彼らは日本語の能力を通してオーストラリアの社会に居場所を作り出すことがで

1 (2018). The Soft Power 30. <https://softpower30.com/>. Portland Communication.

きたのである。

2. 英語習得を目的としたオーストラリアへの移住

台湾、中国、香港では、教育のために外国に子供を留学させるという傾向や動きが強くあるが、韓国では国策として1990年から韓国では母親と子供が英語圏の国に移住することが非常に多くなってきた。当初はアメリカ合衆国が一番人気の行き先であり、次いでイギリスであったが、近年では安全で安価というイメージからオーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、グアムを行先を選ぶケースが多くなってきている。2000年ごろからオーストラリアのクイーンズランドへ来る韓国人が増えている。

子供の行き先は親が決めることが多く、どのくらいの人数が海外にいるのか分からない。多くは母親が同行するが、兄弟で行く子供達もいれば、1人で行く子供もいる。親戚の家に住む場合もあれば、ホームステイや下宿をする場合もある。離れている間、親は子供に電話で連絡をとったり、1年に1、2回会いに行ったり、子供を学校が休みの間に一時帰国させたりする。

ここ20年くらいの間、外国、特に英語圏の国で勉強する留学生の数が非常に多くなってきている。それと同時に、留学生の異文化への順応性に関する調査も増えてきた。しかし、質的調査に基づく研究は少なく、特に長期的な研究が少ないのが現状である。文化的な順応性というものは、長期間に渡り続いていく過程であり、1回のデータ収集だけで探ることは困難である。さらに深く、細かな情報を得るためには長期的なスパンで調査を行うことが求められる。

3. 調査の方法

私は一人の参加者につき1~2か月に1回会い、インタビューを行った。10人は4回ずつインタビューをしたが、1人は様々な事情で2回となり、最終的に延べ42回のインタビューを実施することができた。インタビュー調査にかけた期間は約7か月におよんだ。初回のインタビューの目的は、参加者のオーストラリアにきた時から現在までの経験と、人との交流を探ることであった。2~4回目のインタビューは最初のインタビューと関連付け、日々の人との交流やマスメディアとの関わりについての話しを聞くことであった。例えば、参加者と話しながら、以下のような質問をした。

「最近、誰に一番よく連絡していますか?」「どうやって連絡を取りますか?」

「どのソーシャルメディアを良く使いますか?」

「最近あなたの生活に何か大きな変化はありましたか?」

このような質問を通して、参加者の心に潜む話を引き出していくことができた。インタビューのオーディオファイルを書き起こした後、それを読みながら大きな変化やパターンを探し、パターンや変化の原因と結果を特定した。参加者のコミュニケーションとアイデンティティーの変化にフォーカスしながら、いくつかのケース・ストーリーに書き出

した。

4. インタビューの結果

参加者にインタビューしていくうちに、集めたデータの中から予想外の事柄を発見した。それは、オーストラリアの社会における日本語のステータスとオーストラリアで日本語を勉強することの有益性である。

インタビューをする中で何人かの参加者から偶然にも日本や日本語についての話が出た。参加者の中には高校や大学で日本語を勉強したことがある人が何人もいたのである。1人の参加者以外は全員オーストラリアで日本語の勉強を始めた。参加者のインタビューから、日本語の外国語としてのステータスとオーストラリア人の韓国人や韓国の文化に対する認識について非常に興味深い情報を得ることができた。

インタビュー中、私の方から日本や日本語に関する発言をすることはなかったが、数人の参加者は自ら日本や日本語についての話しを始めた。例えば、オーストラリアの高校で日本語の勉強を始めた参加者がいた。日本語と韓国語は文法や単語が似ており、韓国人にとっては比較的日本語の授業はやさしく、オーストラリアの高校に入ると、第二言語として日本語の科目を選択することがよくあるようだ。

また、参加者の経験では、オーストラリア人は韓国の文化や言語についての知識が非常に低く、初めて会うと頻繁に国籍を間違われたそうで、日本人や中国人だと思われたことがあると言っていた。

インタビュー期間中、2人の女性参加者は高校教員を目指し、大学で教育学を専攻していた。2人はESL (English as a Second Language) と日本語を教えることにした。インタビューした時に本当は韓国語を教えたいけれどオーストラリアでは韓国語の授業を提供する学校が少なく、日本語の需要があるため、日本語を教えることになったと言っていた。

確かにオーストラリアの高校と大学では、韓国語の授業を提供するところよりも日本語を提供する学校の方が多い。オーストラリアでは20世紀の始めから、日本語の学習が広まった²。現在、アジアの国の言語では日本語が最も多く学習されている。また、オーストラリア人は韓国よりも、日本の文化や言語についての知識の方が高い傾向にある。

5. エリカとユナのケース・ストーリー

参加者の中にエリカとユナという2人の女性がいた。彼女たちは特に日本語のステータスを利用することでオーストラリア社会に居場所を見出したケースである。

2 第二次大戦の前から日本語学習は人気があったが、第二次大戦中、そしてその後は減少した。しかし1960年代にまた日本語が人気となり、たくさんの大学や高等学校がクラスを立ち上げた。

【エリカ】

エリカは韓国の高校を卒業する直前、父親の転勤で家族と一緒にオーストラリアに来て、現地の高校に入学した。英語力が不足していたため10学年（日本では高等学校1年次）に入った。当初、エリカは英語が不得意だったため、クラスメイトとうまく交流ができず、授業の内容もよく理解できなかった。しかし、エリカは音楽が得意で、しばらくしてからクラスメイトがそのことに気づき、エリカに話しかけてくるようになった。先生も授業の後にエリカをサポートしてくれるようになり、エリカは徐々に英語でコミュニケーションができるようになっていった。

韓国で日本語を2年間勉強しており、オーストラリアでも学習を続けようと思っていたため、オーストラリアの高校にいる間、日本語の授業を取ったり、インターネットのサイトで日本人のペンパルを見つけて、日本語でメールを交わすようになった。

その後エリカが高校を卒業した時、父親の転勤で家族が韓国に戻るようになった。しかし、エリカはオーストラリアに1人で残ることを選んだ。その理由は、英語が大変であっても、韓国の高校を卒業していない彼女にとって韓国の大学への入学は困難なため、オーストラリアの大学に入学した方がいいのではないかとということだった。

オーストラリアの大学に入学すると、クラスメイトのほとんどは白人のオーストラリア人だったため、その中でエリカは目立つ存在だった。クラスメイトの中にはアジアの文化や韓国のポップミュージックに興味を持つ学生がいて、エリカは彼らと友達になった。英語はまだ片言だったが、日本語が得意なため、それが彼女の自信になった。大学のエッセイやレポートはオーストラリア人のクラスメイトでさえも難しいものだったため、英語が第一言語でないことで自分が不利だと強く感じる事はなかったようだ。

インタビューを行っている期間に、エリカは現地の高校で教育実習をした。残念なことに担当したオーストラリア人の日本語教員はエリカをサポートしてくれず、色々といじめのようなことをした。それはあまりよくない経験だったが、エリカは教育実習先の高校生と仲良くなった。それまで英語が第二言語であることはエリカにとって不利なことがほとんどだったが、教え子の生徒に英語と日本語を勉強した経験を伝えると、彼らは「私も先生みたいに3ヶ国語を話せるようになりたい」とか「先生みたいに日本語を頑張って上達したい」などと言った。

このような経験から、エリカは日本語のステータスを使って、英語が第一言語ではないという自分の不利な立場を越えることができ、さらには多言語が話せる、マルチリンガルなアイデンティティーを作り上げることができた。その後エリカはオーストラリアの高校で日本語の教師として働いている。

【ユナ】

ユナは日本語のステータスの影響により、経済的なメリットを受けることができた。ユナは16歳の時に父親の判断で家族と一緒にオーストラリアへ移住した。ユナの父親は韓

国よりもオーストラリアの社会は性差別が少ないため、ユナとユナの姉はオーストラリアに住むことでより社会的地位の高い職業に就けると考えていたからである。移住する前、ユナの英語力は低く、あまりオーストラリアに関する知識もなかったが、父親を信じて移住した。

現地の高校に入ってもオーストラリア人のクラスメイトとの交流がなかなかできなかった。高校の2学年³に入ったので、他の生徒は既に友達ができていた。ユナは同時に入った中国人の留学生と仲良くなった。お互いに英語が第二言語でありコミュニケーションが自然にできた。ユナは友達ができたことに喜んだが、白人のオーストラリア人の友達を作りたいと思っていた。ユナによると、それは英語の能力がある証拠であり、オーストラリア社会に参加できたことを示すものだろう。

高校卒業後、オーストラリアの大学に入学し、経済学と日本語を専攻することにした。大学の日本語の授業は教師が一方的に教えるものではなく、学生の積極的な参加が求められる授業だったため、クラスメイトと交流する機会がたくさんあった。ユナは日本語の教室の中で新しいアイデンティティーを取り込むことができた。それは英語が第二言語であるという不利なアイデンティティーを、周りのみんなと同じ日本語が第二言語であるというアイデンティティーに変えることができたということだ。この経験のおかげでユナは英語が母国語のオーストラリア人と交流する自信を得ることができ、日本語の授業以外でもクラスメイトと交流できるようになった。

私とのインタビュー期間中、ユナはアルバイトを探していた。街の中心部にある薬局に履歴書を持って行き、お店のマネージャーと面接をした。面接の時、ユナは自分が「日本語も中国語も韓国語ができる」と語学力をアピールした。実際にはその当時ユナは既に日本語の勉強をやめていたし、中国語は少ししか話せなかった。しかし、薬局はアジア系の観光客や留学生がたくさん来る場所に位置しており、英語ができないお客さんがよく来るお店だったため、マネージャーにとってユナは英語が第二言語の人ではなく、マルチリンガルな才能の持ち主ととられ、ユナはそのお店に採用されたのである。

6. おわりに

エリカとユナの話は、ソフトパワーとしてのオーストラリアにおける日本語のステータスと有益性を示している。語学力があることはコミュニケーションができるというだけでなく、社会の中で周りから見られるアイデンティティーにも影響を及ぼしている。今回のケースでは、エリカとユナは日本語のステータスを使用する事でオーストラリアのコミュニティに居場所を作り出すことができた。

長期的な研究は色々と難しい点があるが、それでも、長期的なアプローチを使用することでより深く詳細なデータを入手することができる。

3 オーストラリアでは中学校と高等学校が別れていないため、日本の中学2年生に当たる。

個人のアイデンティティは周りの人や環境から多くの影響を受ける。その影響は様々なコミュニケーションの形や方法を通して感じ取ることができる。しかし具体的にコミュニケーションの影響がどのようにして進んでいくのかは不明である。留学生など、国を移動する人々は、特にソーシャルメディアやスマートフォンアプリを通しいつでもどこでも誰かと連絡をとることができる。さらに、マスメディアを通して様々な情報を得ることができるので、これらの影響をより深く調査することが求められる。

組織的なレベルでは、留学を斡旋する大学や学校、多国籍企業などが外国へ学生や雇用者を送る際、彼らが直面する異文化への順応の難しさや、そこから得られる利益についてよく調べ理解して送り出すべきである。また、本研究のケースのように、外国へ子供を移住させる親も、その影響やそこから起こる問題について事前によく備えるべきであろう。

【参考文献】

- Lovely, E. (2018). Accessing the Soft Power of Japanese Language in Australia: Young Korean Migrants Studying Japanese as a Foreign Language. In K. Hashimoto (Ed.), *Japanese Language and Soft Power in Asia*. Palgrave Macmillan.
- Nye, Joseph S, Nye, Joseph S., & Ebooks Corporation. (2004). *Soft power the means to success in world politics* (1st ed.). New York: Public Affairs.

(らぶりー・えすたー 女性文化研究所特別研究員)